

富士宮市文化財調査報告書第47集

丸ヶ谷戸遺跡Ⅲ

—Yumi Reaityによる宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第47集

丸ヶ谷戸遺跡Ⅲ

—Yumi Realtyによる宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

富士宮市教育委員会

例 言

- 1 本書は、富士宮市大岩字丸谷戸723-1ほかに所在する丸ヶ谷戸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、Yumi Rearity（大石由実）による宅地造成工事に伴い、調査の依頼を受けた富士宮市教育委員会が、榑東日の支援業務をもって実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成24年3月12日から同年4月23日まで現地調査を実施し、調査面積はおよそ500㎡となった。同24日から整理作業、報告書作成作業を実施し平成25年5月31日に事業を完了した。
- 4 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査主体者	教育長 佐野敬祥（平成24年3月31日まで）
	＃ 池谷眞徳（平成24年4月1日から）
調査担当者	富士山文化課 課長 渡井一信
	主幹兼学術文化財係長 馬飼野行雄（平成24年3月31日まで）
	＃ 伊藤昌光
	主任学芸員 渡井英誉（平成24年3月31日まで）
	主査 保竹貴幸
	囑託員 田中城久（平成24年6月30日まで）
	＃ 今井和代（平成24年7月1日から）
	＃ 馬飼野行雄（平成24年4月1日から）
	＃ 五味奈々子（平成25年4月1日から）
支援業務員	小金沢保雄（榑東日監督員）・石川眞（同作業員・以下同じ）・大平美奈子・佐藤法夫・渋谷政夫・園田勝・田中弘子・古郡善明・山田泰三・山崎英美子・渡辺成子

整理作業員 佐藤節子・堀内麻美・渡辺真紀子・渡辺麻里

- 5 本書の執筆は、以下のとおりである。
 - 第1章 保竹
 - 第2章 馬飼野
 - 第3章 今井
 - 第4章 1 五味、2～5 今井、6 五味・今井
 - 第5・6章 今井
- 6 写真撮影は、馬飼野が担当した。
- 7 本書の編集・印刷・出版に関する事務は、富士宮市教育委員会富士山文化課が行った。
- 8 本調査に関するすべての資料は、富士宮市教育委員会で保管している。

目 次

第1章	調査の経過と経緯	1
第2章	環境	2
第3章	遺構	8
第4章	遺物	23
第5章	遺跡の動向	31
第6章	おわりに	35

挿 図 目 次

図1	富士宮市位置図	1
図2	遺跡周辺の地質図	3
図3	周辺の遺跡分布図	5
図4	標準土層図	8
図5	調査区位置図	9
図6	遺構平面図	10
図7	古墳時代遺構分布図	11
図8	竪穴建物01・方形周溝墓01・溝01	13
図9	方形周溝墓02	14
図10	方形周溝墓02東壁土層断面図	15
図11	中世以降の遺構分布図	16
図12	道01・溝02～05	18
図13	溝06・大型土坑01	19
図14	第一次調査の道と本調査の道	20
図15	調査区南側の土坑・ピット群	21
図16	縄文土器実測図	24
図17	古墳時代の土師器実測図	26
図18	古墳時代の土師器・磁器・石器実測図	27
図19	平成20年度確認調査出土遺物実測図	30
図20	県史報告の土器実測図	32
図21	当遺跡における方形周溝墓の分布	34

挿 表 目 次

表1	遺跡一覧表	6	表2	遺構計測表	22
表3	縄文土器観察表	36	表4	古墳時代の土師器・磁器・石器観察表	37
表5	土器観察表(平成20年度確認調査)	37	表6	再録品観察表	37

第1章 調査の経緯と経過

丸ヶ谷戸遺跡は縄文・弥生・古墳・中世の遺跡で、平成元年から2年にかけて行われた発掘調査では、富士山の方向と主軸が重なる前方後方形周溝墓が出土している。

本調査の起因となったのは、Yumi Realityによる宅地造成工事が、埋蔵文化財包蔵地「丸ヶ谷戸遺跡」の範囲内の富士宮市大岩字丸ヶ谷戸723-1ほか4, 155.87㎡で計画されたことによるもので、周知の



図1 富士宮市位置図

埋蔵文化財包蔵地内での土木工事として、平成23年3月22日付けで富士宮市教育委員会（以下「市教委」という。）に対して文化財の所在の有無について照会がなされた。

これを受け、市教委は平成23年4月18日から22日まで遺跡の確認調査を実施した。調査の結果、古墳時代前期と思われる遺構と同時期の土師器および縄文土器が検出されたため、同年5月23日付けで文化財が所在していることを回答した。

この回答をもって、Yumi Realityは市教委と効果的な遺跡保存のための検討を重ね、保存の不可能な約500㎡を調査対象予定地として、平成24年1月24日付けで、静岡県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長宛に埋蔵文化財発掘の届出書を提出した。

これを受けた県教委は平成24年2月1日付けで、土木工事等のための発掘に係る指示について、保存不可能な約500㎡に対して本発掘調査を、残りの部分は工事立会いを実施することを通知した。これを受けたYumi Realityは、市教委に埋蔵文化財発掘調査依頼書を同年3月7日に提出した。

また、発掘調査の迅速化を図るため、Yumi Realityは、㈱東日と埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託契約を締結し、併せて同年3月9日付けで市教委と3者をもって「富士宮市丸ヶ谷戸遺跡埋蔵文化財発掘調査等に関する協定書」を交わした。

発掘調査は市が主体となり、平成24年3月12日から4月23日まで現地調査を行った。調査の結果、方形周溝墓等の古墳時代前期を中心とした遺構が検出され、コンテナ2箱分の遺物が検出された。

出土文化財は、同年6月4日付けで、県教委教育長宛に埋蔵文化財保管証を、同日付けで富士宮警察署長に埋蔵物の発見届を提出した。その後、同年7月6日付けで富士宮警察署長より、同年6月26日付けで県教委による埋蔵文化財の認定を受けた旨の通知を受けた。

資料整理作業は、現地調査終了後から行い、平成25年5月31日の本報告書の刊行をもって本事業を終了した。

第2章 環境

1. 地理的環境

丸ヶ谷戸遺跡は、富士宮市大岩字丸ヶ谷戸に所在する。JR富士宮駅から北東へ2.2kmほど向かった緩やかな丘陵上で、かつては丘陵を下る小河川沿いに農家が点在し、その間を茶畑や水田が広がる典型的なこの地方の田園風景を醸し出していた。しかし、昭和46年（1971）に遺跡から1kmほど南に下った丘陵の先端に東海道と甲州街道を結ぶ国道139号（吉原大月線）の富士宮バイパスが開通してから、沿線に近代的な商業施設が立ち並ぶようになり、さらに昭和57年（1982）に西富士道路が開通して、富士市や東名高速道路富士インターチェンジから東駿河湾臨海地帯に開いた交通網は住宅の需要を一気に増し、さらにバブル景気と重なり、商業施設の背後の田畑に宅地化が進んでいった。

本遺跡にも平成元年に宅地造成工事、平成12年に共同住宅建設、平成23年には本調査の原因となった宅地造成工事と、さらに1件の宅地造成工事が実施され、その間にもミニ開発が繰り返され、風景は徐々に近郊住宅地化されて、本調査の実施個所が最後の空白地であったとも言える。

丸ヶ谷戸遺跡が位置する大岩地区は、市域の東辺を占める富士根地域の中ほどにあたり、古富士泥流と新富士火山の接点で新富士の溶岩が露呈して「大きな岩がごろごろしている。」ことが地名の由来とされる。この新富士火山の噴出物は透水性に優れ、不透水層である古富士泥流との境いからは多くで湧水が生まれ、大岩地区の下方には「小泉」、「出水」、「泉平」や「清水」など豊水地帯特有の地名を見る。反面、上方は古富士泥流が半島状の高まりとなっていたために新富士溶岩が及ばず、地下水脈が形成されない乏水地帯となり、「粟倉」や「焼畑」の地名をみても、ここを境に自然・人文環境とも大きく変わるといってよい（図2）。

この半島状に残る古富士泥流の付け根部分に村山浅間神社が位置する。境内地の字名は「水神」で、神社の東の窪地に湧水があり、これを導水してかつての富士登山の際の水垢離場が築かれていた。標高490m地点で、富士山中の湧水地のなかで最も高い位置にある。これは上方の新富士の扇状地堆積物の下層を流れ下っていた地下水が、神社が位置する古富士泥流に当たって窪地に湧き出たもので、ここから泥流の東縁に沿って4kmほど下って、丸ヶ谷戸遺跡の東150mを流れる大沢川となる。遺跡の西を流れる滝沢川も村山浅間神社の西方の窪地を源にして古富士泥流の西縁に沿って下り、両河川とも遺跡の位置する丘陵の縁を並行するように数百m下り、やはり富士山中を源として小河川を集めて下る弓沢川に合流する。なお、丸ヶ谷戸遺跡の中央部分で標高170m、弓沢川の合流地点で標高およそ145mである。

丸ヶ谷戸遺跡は上述の古富士泥流の先端が崖状となって、火山性扇状地に没する地形の変換地から緩い斜面をやや下った南北に長い微高地を占有している。それは村山から古富士泥流の縁を下ってきた大沢川と滝沢川が幅400mほどで並行して山間から扇状地に出た後、扇状地を侵食して作った細長い逆台形状の丘陵で、南北約1km、南辺は200mほどの規模である。この丘陵の中央には小河川が流れ、台地を大きく二分して、東の山裾を中心にした「峯石遺跡」と、西の細長い微高地に本遺跡が営まれることになる。

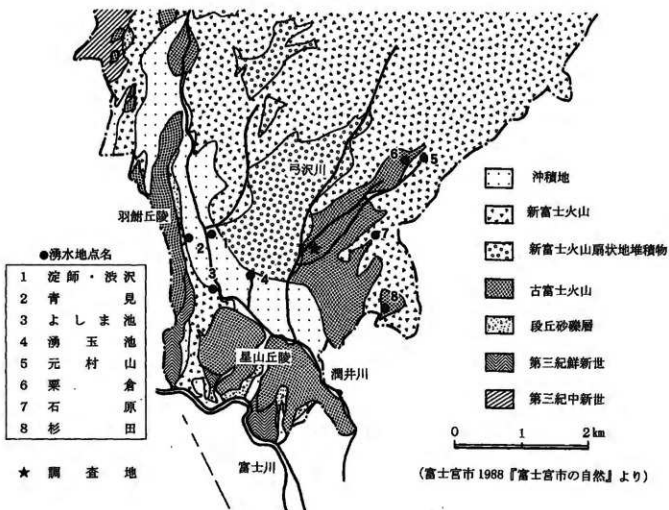


図2 遺跡周辺の地質図

遺跡の規模は南北で500m、東西140m（最大幅）で、遺跡の中央付近の東隅から南にかけて先ほどの小河川が流量を増して谷地形を大きく形成し、かつては水車による精米施設が築かれるなど、南からの景観は独立丘の感がある。

丘陵の南には、かつての大宮町（現富士宮市）東町からの「道」が達し、遺跡を並行して上り「社領」から村山浅間神社が建つ「元村山集落」に向かう様子が明治時代中頃の地図に記されている。

2. 歴史的環境

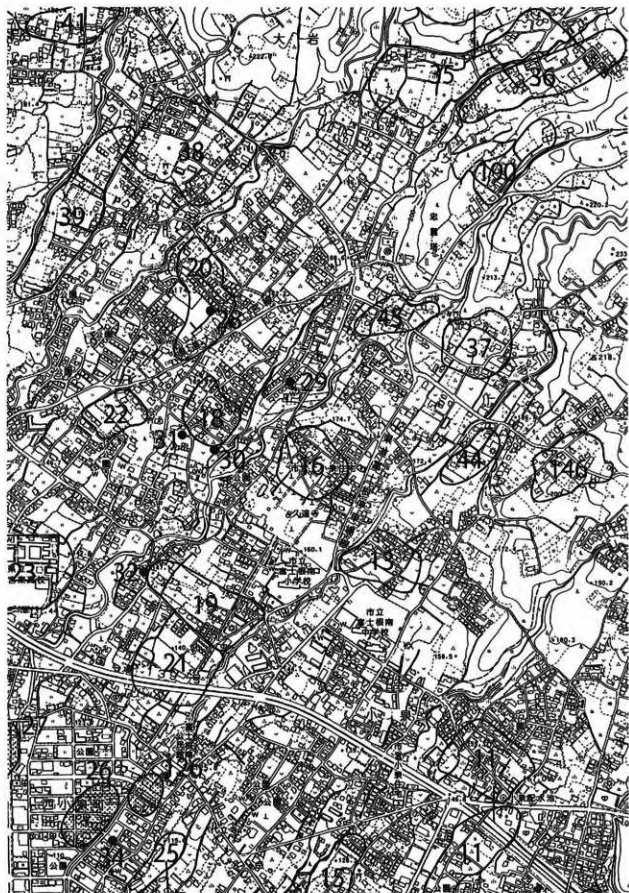
丸ヶ谷戸遺跡（富士宮市遺跡№39、以下同表示）が位置する富士根地域は大岩地区で地形を変えて、北側が富士山の野溪を伴う山間地形で、南側が火山性扇状地の低丘陵で形成されている。この状況は遺跡の分布にも見てとれて、北側の山間地には稲干場遺跡（50）やワラビ平遺跡（189）などの縄文時代の遺跡が圧倒し、最高所の村山浅間神社遺跡（184）まで12遺跡が確認されるなか、東谷戸遺跡（48）だけが古墳時代を重複する。逆に南側の低丘陵には本遺跡をはじめ、峯石遺跡（38）、神祖遺跡（18）、三ツ室遺跡（22）、木ノ行寺遺跡（23）、上石敷遺跡（126）、石敷遺跡（25）など21遺跡中、17遺跡が縄文時代と弥生時代後期から古墳時代を重複しており、縄文時代の単独遺跡は、小泉向原遺跡（13）と寺ノ後遺跡（16）の2か所だけである。さらに低丘陵の末端で沖積地縁辺には上石敷遺跡や、向田遺跡（26）、中沢遺跡（27）のように古墳時代の単独遺跡が営まれるなど、その時代毎の生業に合わせた遺跡の立地が垂直分布に表れている。

丸ヶ谷戸遺跡は今調査において、縄文時代の早期・中期の土器・石器片が風倒木痕や竪穴建物の掘方、また土層確認トレンチから若干数が検出された。昭和27年に縄文中期曾利式土器が出土して縄文時代を重複することは確かであったが、今調査区より南で実施された過去2回の調査では縄文遺物は検出されなかったことから、縄文時代の分布域は北側の山裾に寄った緩斜面が想定されよう。

まず、縄文時代早期後葉の子母口式土器に併行する清水柳E類土器と鶺鴒ヶ島台式土器が見られる。富士宮市は縄文早期遺跡が多いことも特徴のひとつで、富士根地域では先ず、早期中葉の細久保式期に若宮遺跡（9）が成立し、高山寺式期に代官屋敷遺跡（11）が、続いて田戸下・上層式期に相木式を伴って石敷遺跡が発生している。この後、代官屋敷遺跡は子母口式期に併行する清水柳E類期から野島式期、さらに鶺鴒ヶ島台式期に継続し、元野式期、茅山上層式期まで縄文早期後半を連続してなり、縄文前期清水ノ上2式期と諸磯C式期、縄文中期五領ヶ台式期まで継続されている。代官屋敷遺跡は丸ヶ谷戸遺跡から南東に2km向かった丘陵で、新富士火山扇状地から十数m以上の急崖を形成する古富士泥流の末端にあたり、丘陵中央の小河川を挟んで東に若宮遺跡が位置するなど、縄文早・前期の遺跡の適地で、当該期の主要地区であったといえよう。

この代官屋敷遺跡に併行して、丸ヶ谷戸遺跡が子母口式期に、上石敷遺跡が野島式期に登場する。丸ヶ谷戸遺跡は鶺鴒ヶ島台式期に再登場するが、これ以降、縄文前期後葉の諸磯C式期まで活動を停止する。しかし資料は貧弱で、市域全体でも不明瞭な時期となる。

反面、縄文中期に至り五領ヶ台式期から勝坂式期を向かえると遺跡が活発化して、なかでも曾利式期の後半に爆発的増加がみられ、例外なく丸ヶ谷戸遺跡でも勝坂式土器と曾利式土器をみる。



...消滅
 0
400m

図3 周辺の遺跡分布図

表1 遺跡一覧表

番号	遺跡名	標高	種別	時代	遺構・遺物
3	滝ノ上遺跡	220	集落・墓	縄文(前~後)	敷石住居、配石墓、土器、石器、石製品
7	杉田西原遺跡	180	散布	縄文(早・中)、古墳	土器、石器
9	若宮遺跡	150	散布・集落	縄文(早)、弥生	竪穴住居、土器、石器、石製品
11	代官原敷遺跡	155	散布・集落	縄文(早・中・後)、古墳	土器、石器
13	小泉向原遺跡	160	散布	縄文(中)	土器、石器
15	中ノ土手遺跡	128	散布	縄文(前)、古墳(前)	土器、石器
16	寺ノ後遺跡	170	散布	縄文(中)	土器
18	神祖遺跡	168	散布	縄文(早・中)、古墳	土器、石器
19	寺内遺跡	150	散布	縄文(前・中)、古墳	土器、石器
20	大窪遺跡	170	散布	縄文(中・後)、古墳	土器、石器
21	小泉中村遺跡	140	散布	縄文(後)、古墳(前)	土器、石器
22	三ッ壺遺跡	155	散布	縄文(前)、古墳(前)	竪穴住居、土器、銅器
23	木ノ行寺遺跡	140	散布・集落	縄文(中・後)、古墳、奈良	竪穴住居、溜井(古墳)、土器、石器
24	権現遺跡	95	集落	縄文(前・中)、古墳(前)、奈良	竪穴住居、土器
25	石敷遺跡	110	散布・集落	縄文、弥生、古墳(前)、奈良、中世	竪穴住居、土壇、土器、石器、石製品、陶磁器
26	向田遺跡	115	散布	古墳(前)	土器
27	中沢遺跡	120	散布	古墳、奈良、中世	土器
29	神祖山ノ神古墳	176	古墳	古墳(後)	土器、石製品
30	神祖2号墳	164	古墳	古墳(後)	土器、石製品
31	神祖3号墳	162	古墳	古墳(後)	
32	寺内山ノ神古墳	143	古墳	古墳(後)	石室?
35	箕輪4遺跡	220	散布・集落	縄文(中・後)、古墳	竪穴住居、土器、石器、石製品、石埴
36	箕輪5遺跡	220	散布・集落	縄文(早~後)、古墳	竪穴住居、土器、石器、石製品、石埴
37	出水遺跡	185	散布	縄文(前・中)、古墳	
38	峯石遺跡	182	散布・集落	縄文(前~後)、古墳、奈良	竪穴住居、土器、石器、石製品
39	丸ヶ谷戸遺跡	175	散布・集落・古墳・墓	縄文(中・後)、弥生、古墳、中世	前方後方形周溝墓、竪穴住居、土器、石器、陶磁器
40	辰野遺跡	205	散布	縄文(早・中~晩)、弥生(中)、古墳	土器、石器
41	時田遺跡	192	散布	縄文(中・後)、古墳	土器
44	出水東遺跡	183	散布	縄文、古墳(前)	
45	出水西遺跡	185	散布	古墳(前)	土器
48	東谷戸遺跡	315	散布	縄文(中)、古墳(前)	土器、石器
50	稲干場遺跡	280	散布	縄文(早・中・後)	土器、石器
105	泉遺跡	125	散布・集落	縄文(後)、弥生(後)、古墳、平安、近世	竪穴住居、土器、石製品、銅器、銅鏃、庄内埴
106	南部谷戸遺跡	113	集落・墓	縄文、古墳	方形周溝墓、土器、尖頭器、勾玉、磨製石鏃
107	月の輪平遺跡	125	集落	縄文、古墳	竪穴住居、土器、石製品、金属器
108	滝戸遺跡	130	集落・古墳・墓	縄文(中・後)、弥生、古墳	配石遺構、方形周溝墓群、土器、土製品、石器、石製品
112	月の輪上遺跡	125	散布・集落	縄文、弥生、古墳、中世、近世	環溝集落、屋敷地、土器、土製品、石器、土製勾玉
126	上石敷遺跡	120	集落・墓	縄文、古墳、奈良、中世、近世	竪穴住居、土器、石器、有首尖頭器
146	金井坂遺跡	200	散布	縄文(中)	土器、石器
184	村山強間神社遺跡	490	散布・社寺・その他	縄文、平安、中世、近世、近現代	土器、陶磁器
189	ワラビ平遺跡	340	散布	縄文(前・中)	土器
190	滝沢遺跡	230	散布	縄文	土器

前述の代官屋敷遺跡が五領ヶ台式期をもって遺跡の活動を終え、火山性扇状地上石敷遺跡が進出していくのは、この時期を境に広域な緩斜面が縄文中期遺跡の適地となったためと思われる。

丸ヶ谷戸遺跡でも古富士泥流の山裾を後背にした緩斜面に、先ず勝坂式期に遺跡が営まれ、曾利式期・加曾利E式期の後半に大きく発展して遺跡を閉じたことは今調査の僅かな資料からも知れる。この傾向は丸ヶ谷戸遺跡から山裾を北東に1kmほど向かった箕輪A遺跡(35)や、市城東辺の滝ノ上遺跡(3)、さらに扇状地を下った富士市天間沢遺跡など地域を代表する歴代遺跡にも見てとれ、また丸ヶ谷戸遺跡から北に1.5kmほど上った山間に稲干場遺跡や、大沢川対岸の低丘陵に大室遺跡(20)が新たに進出するなど、この地域でも確実に遺跡は増加している。

その後、丸ヶ谷戸遺跡は長い空白期を経て弥生時代に至りその終末に集落が営まれる。その直前に富士根地域では丸ヶ谷戸遺跡から南へ2kmほど下った火山性扇状地先端で沖積地に接する石敷遺跡で縄文早期以来の営みが開始され、対岸の白尾・星山丘陵の先端で潤井川沖積地を望む滝戸遺跡(108)、泉遺跡(105)や月の輪上遺跡(112)とともにこの地域の開発を進め、こうした弥生文化の受容が丸ヶ谷戸遺跡で「前方後方形周溝墓(全長26m)」を造立するまでに発展していく。

古墳時代、つまり大廓式の段階になると丸ヶ谷戸遺跡をはじめ、上石敷遺跡や、神祖遺跡(18)などが白尾・星山丘陵の遺跡群とともに活発化して、大廓Ⅲ式期以降、隣接の峯石遺跡、辰野遺跡(40)や権現遺跡(24)など周辺に遺跡が拡大していくが、星山丘陵の月の輪平遺跡(107)ほど、はっきりした様相は見せずに衰退していく。また丸ヶ谷戸遺跡のように集落断絶後に墓域に転換されていく遺跡は、潤井川対岸の微高地に位置する南部谷戸遺跡(106)と滝戸遺跡の3か所に認められる。

3. 遺跡の層序

丸ヶ谷戸遺跡の地質的基盤は古富士泥流を覆う新富士火山の旧期火山性扇状地で、その上部を新富士の火山性降下物が堆積している。遺跡一体は緩傾斜地で「馬の背」状の頂部にあたり、表土から火山性扇状地上面にあたる礫を含んだ黄褐色の粘質土層まで1mほどで達するなど、他遺跡の堆積層より薄く、層自体にも密度が少なく流動状態のなかで堆積していった状況が窺える。

第1層 表土層

黒色の有機質土で、いわゆる耕作土であるが、流出が著しく非常に浅い。土器片の散布目立つ。

第2層 大沢ラビリ層

緻密なスコリア粒からなる堅固なマサ層で、富士マサと呼ばれる。乾燥すると橙色から白っぽくなる。堆積時期はB. P (1950年を0年とする) 約2700年前の新富士火山の噴火によるもので、弥生・古墳時代遺構の検出層となり、赤色系で硬質であることから遺構検出は容易である。

第3層 黒褐色土層

クロボクと呼ばれる、黒色の強い粘質土。

第4層 褐色土層

通称「栗色土層」で縄文時代の鍵層となり、上部の千居ラビリの年代がB. P 3500年前後とされている。

第5層 暗褐色土層

上層の褐色土が富士黒土の影響で暗い色調を呈する。下部に点在する鬼界ヶ島カルデラ起源の火山性ガラスの噴出時期からB. P6000年ほど前とされる。

第6層 黄褐色粘質土層漸移層

下層の影響を受けるが、大粒の橙色スコリアを含む黒色系の混入土もあり、色調は幾分暗くなる。基本的には富士黒土層（B. P6000年からB. P8000年）が堆積すべきであるが、流動性のなかで下層との攪拌状態での堆積が考えられる。

第7層 礫混入黄褐色粘質土層

新富士火山旧期の扇状地堆積物。

171.0

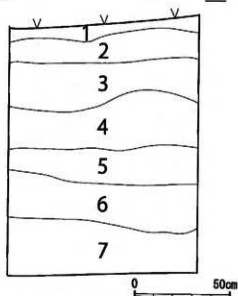


図4 標準土層図

第3章 遺構

今回の調査では、前調査と同様に古墳時代、中近世以降の遺構を確認することができた。

1. 古墳時代

今回の調査では、方形周溝墓2基、竪穴建物1軒、溝1条を検出した。これらの遺構は調査区の北半に分布しており、方形周溝墓01南溝、竪穴建物01、溝01は調査区を南東から北西への斜め方向に走る石垣に切られている。そのため、それぞれの遺構から出土した遺物が接合でき、どの遺構に伴う遺物であるのか不明なものが多い。しかしながら、これらの遺構から出土した遺物は、古墳時代前期の範疇に収まるものばかりであった。

竪穴建物01(図8)

竪穴建物01は、B-3グリットを中心にその範囲が確認されているが、溝01と石垣によって切られており、全体の規模や形状は不明である。北東隅を確認することができ、平面は南北に長軸を持つ隅丸方形の形を呈すると考えられ、褐色スコリア粒子を多く含む明灰褐色粘土ブロックを含む、黒灰色土を用いた堅固で平坦な床面を確認することができ、約12㎡の面積が残存している。

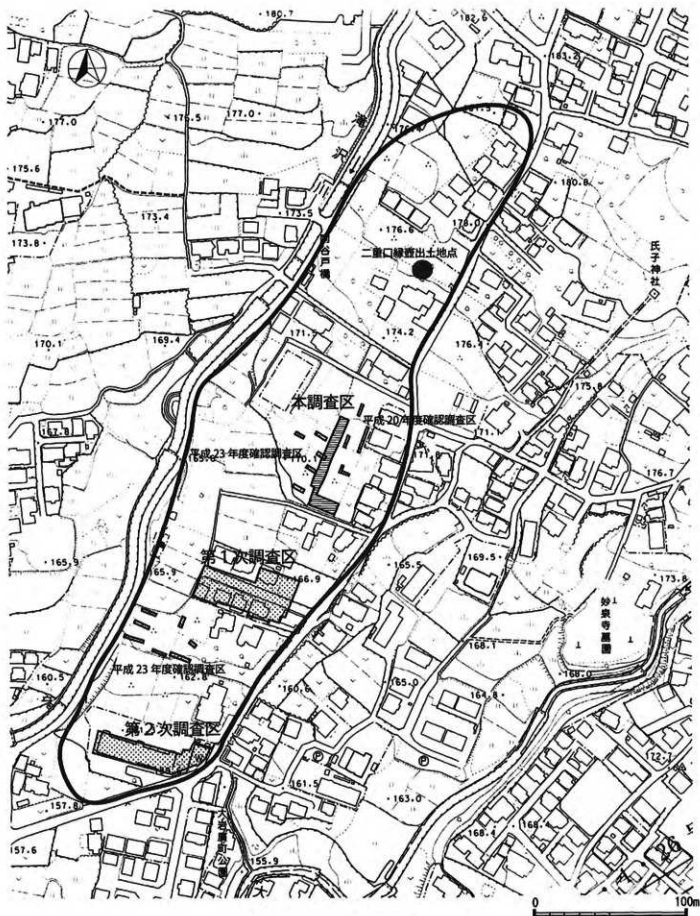


図5 調査区位置図

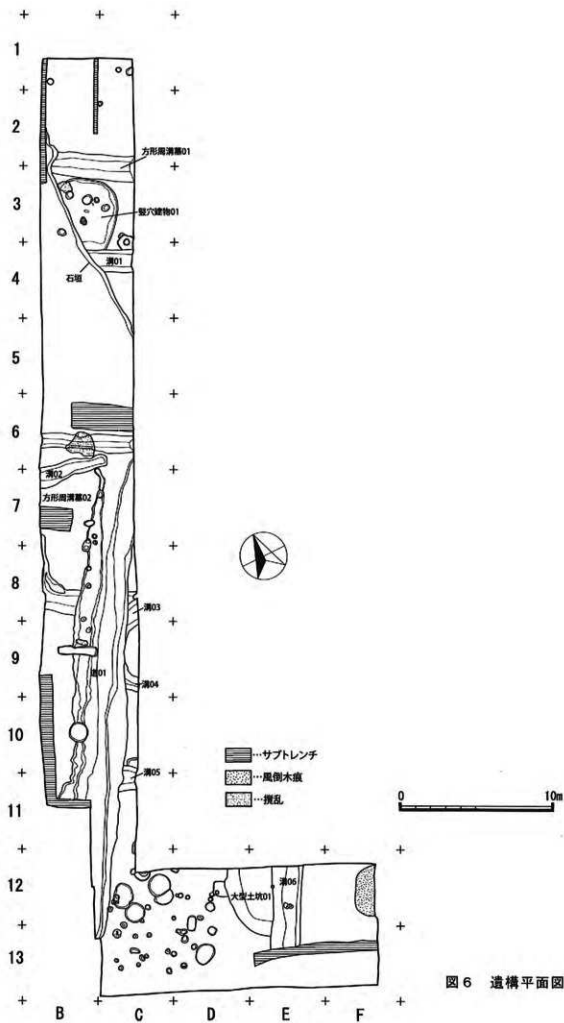


図6 遺構平面図

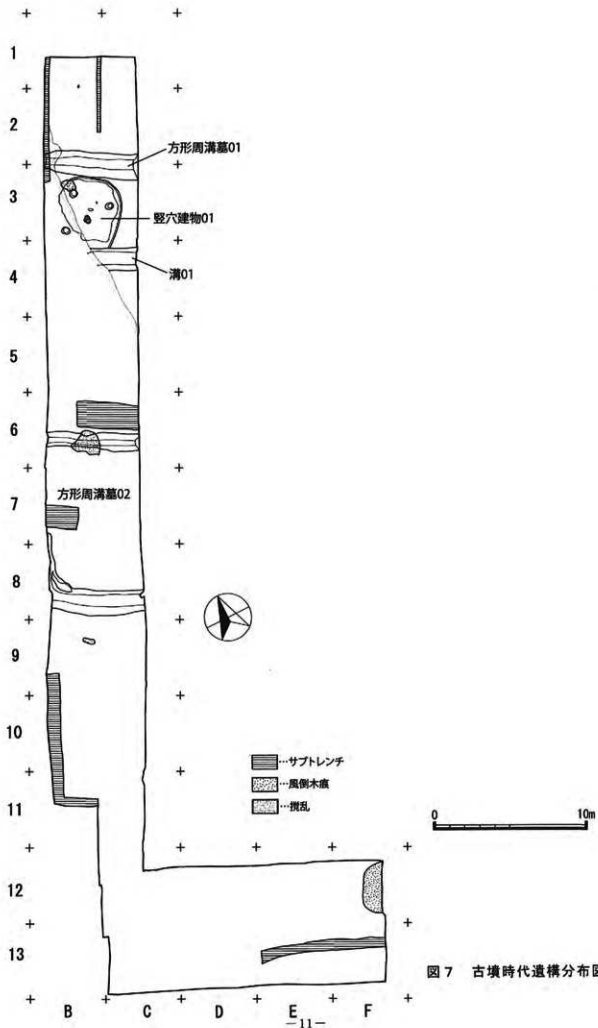


図7 古墳時代遺構分布図

建物の覆土の堆積状態は、壁面方向から流入している状況がよくわかり、床面上層には褐色スコリアブロックを含む暗褐色土が薄く堆積する。こうした土砂の流入状況から、住居跡は人為的に埋められたことを読み取ることができる。

建物内部は、床面から石器1点、人頭大の礫1点、焼土塊を検出した。焼土塊は皿状に堆積を見せ、人頭大の礫が約40cm離れたところにある。人頭大の礫は炉の板石と考えられ、焼土塊との関係からこの場所が建物に伴う炉跡であったと考えて良いと思われる。

掘方は、床下外縁部などには規則性がなく、底面にはやや凹凸があるのみで、明確な床面の二重構造を持つものではなかった。掘方からは2基のピットを検出した。ピット6の平面形は40×50cmの円形で、ピット7の平面形は50×50cmの楕円形の形を呈する。双方とも同規模で、位置関係から支柱穴であると考えられる。また、石垣に切られ消失した部分からピット8を検出し、平面形40×50cmの楕円形で、これらのピットと同規模で、位置関係からみても、ピット8も住居跡の支柱穴であると思われる。そうすると、支柱穴の距離は東西2m、南北2mの正方形となる。柱材のようなものは伴わず、おそらく柱を抜き取ってから床面に似た土で埋められたのであろう。こうした状況から、この建物は住居跡と考えられる。

方形周溝墓01・方形周溝墓02(図8・9)

方形周溝墓01は、B・C-2・3グリットにおいて直線の周溝が確認され、断面V字に近い台形の形状をしている。1.8mの最大幅を測り、深さ0.9mを測る。周溝内はレンズ状に堆積しており、周溝の底に近い堆積土は、ブロック混じりの土である。今回確認した周溝はこの周溝のみで、方形周溝墓01はこの周溝を南溝としここから北へと展開するものであると考えられ、全体の規模やその形態はわからない。

方形周溝墓02は、北溝と南西コーナー、南溝を検出した。東西の広がりにはわからないが、南北9.6mを測る。北溝は幅1.2m、深さ1.2mほどで、南溝は幅1.6m、深さ1.0mと南溝のほうが幅広となっている。また、平成23年度に実施された確認調査区の一部が今回の調査区と重複しており、この確認調査区から南北方向の溝が確認されている。この溝は、今回確認した南西コーナーからのびる西溝と考えられ、西溝は幅1m、深さ1.2mを測る。そうすると、方形周溝墓02は正方形ではなく西方向に傾く平行四辺形の形態をなすと考えられる。

南西コーナーは段を持つが、意図的に角が段になるように築造されたのか、後世に風化や浸食、又は削平によって形成されたものなのかは不明である。

周溝の断面形状はすべて台形を呈し、周溝内の堆積状況は、方形周溝墓01と同様にレンズ状に堆積し、底部付近にブロックが混入した土が確認できる。

盛土は、調査区東壁の土層堆積状況から標準的なものしか見られず、人工的に堆積した状況は認めることができない。おそらく後世に削平されたと考えられ、墳丘面はまったく残っていない(図10)。

これらの方形周溝墓は、第1次調査で発見された方形周溝墓よりも規模が小さく、次章以降で詳しく触れるが、出土遺物からも第1次調査の方形周溝墓や前方後方形周溝墓よりも新しいものと言える。

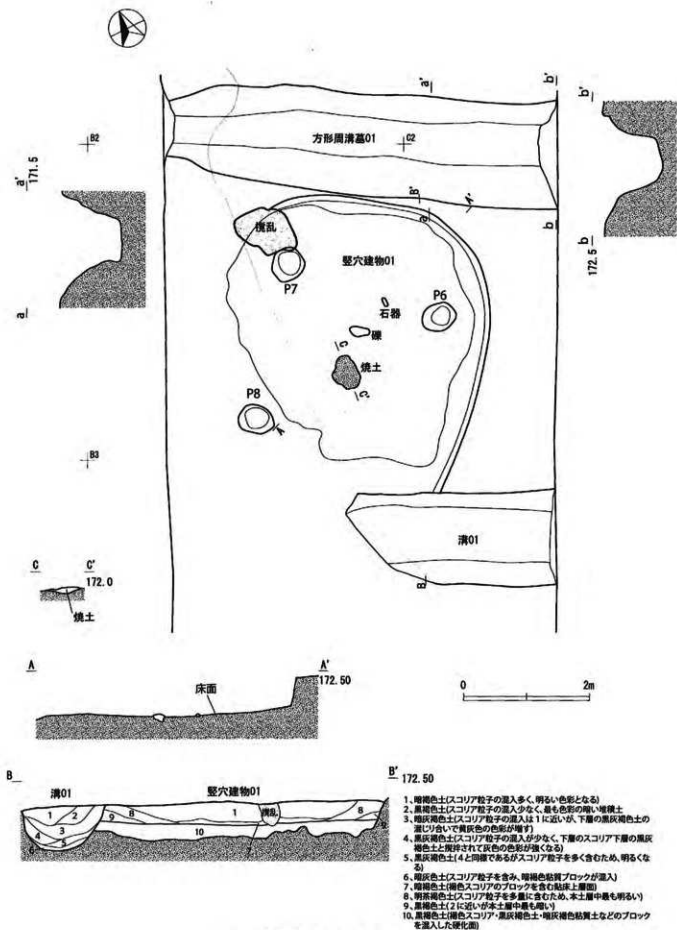


図8 竪穴建物01・方形周溝01・溝01

- 1、暗褐色土(スコリア粒子の混入多く、明るい色彩となる)
- 2、黒褐色土(スコリア粒子の混入少なく、最も色の暗い堆積土)
- 3、暗灰褐色土(スコリア粒子の混入は1に近いが、下層の黒灰褐色土の混じり合いで黄灰色の色彩が暗い)
- 4、黒灰褐色土(スコリア粒子の混入が少なく、下層のスコリア下層の黒灰褐色土と混雑されて灰色の色彩が強くなる)
- 5、黒灰褐色土(4と同層であるがスコリア粒子を多く含むため、明るくなる)
- 6、暗灰色土(スコリア粒子を含み、暗褐色粘質ブロックが混入)
- 7、暗褐色土(褐色スコリアのブロックを含む粘状土層面)
- 8、暗茶褐色土(スコリア粒子を多量に含むため、本土層中最も明るい)
- 9、黒褐色土(2に近いが本土層中最も暗い)
- 10、黒褐色土(褐色スコリア・黒灰褐色土・暗灰褐色粘質土などのブロックを混入した硬化面)

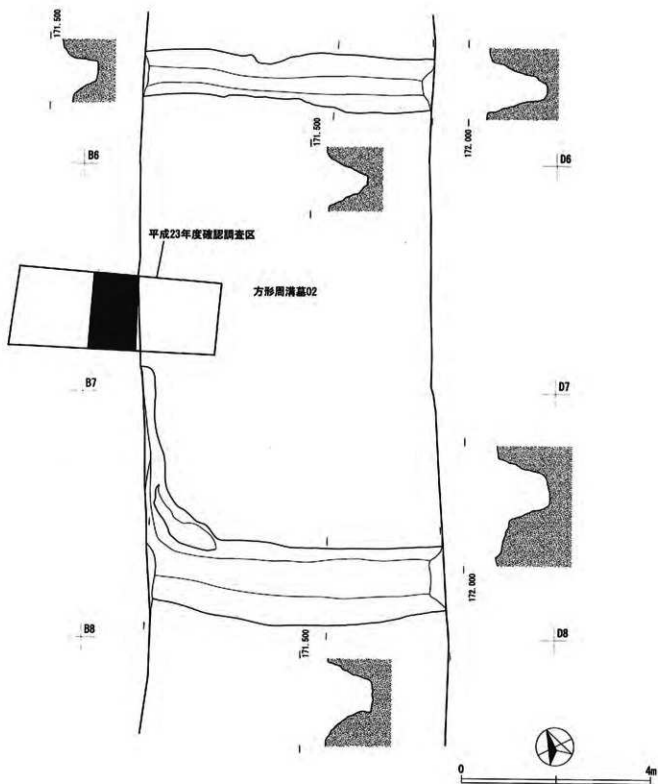


图9 方形周溝墓02

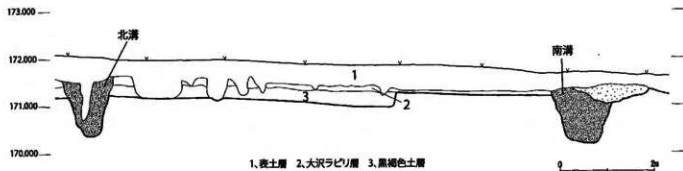


図10 方形周溝墓02東壁土層断面図

溝01(図8)

溝01はC-4グリット内で検出し、前述したように堅穴建物が埋められた後に、建物を切る形で掘削されていることが分かっている。石垣によって削平を受けているため、長さ3m程しか確認できなかったが東西にのびている溝だと思われる。幅1.5m、深さ0.7mを測り、断面形態は逆かまぼこ形をしている。

溝の埋土は、ブロック土を含む土が底に確認することができ、レンズ状に堆積する。また古墳時代前期の土器をわずかであるが伴っているため、周溝墓の溝とも考えられるが、断面形状も異なり、深さも他と比較しても浅いことから今回は溝と判断した。

今回の調査では、調査区南東隅で確認された風倒木痕内、遺構精査時や古墳時代遺構検出時に縄文土器片が一定量伴ったために、さらに下層には縄文時代の遺構があるのではないかと予想された。そのために、調査区南西隅に縄文確認トレンチを設定したが、明確な遺構は認めることができず、縄文時代の包含層が存在することに留まった。

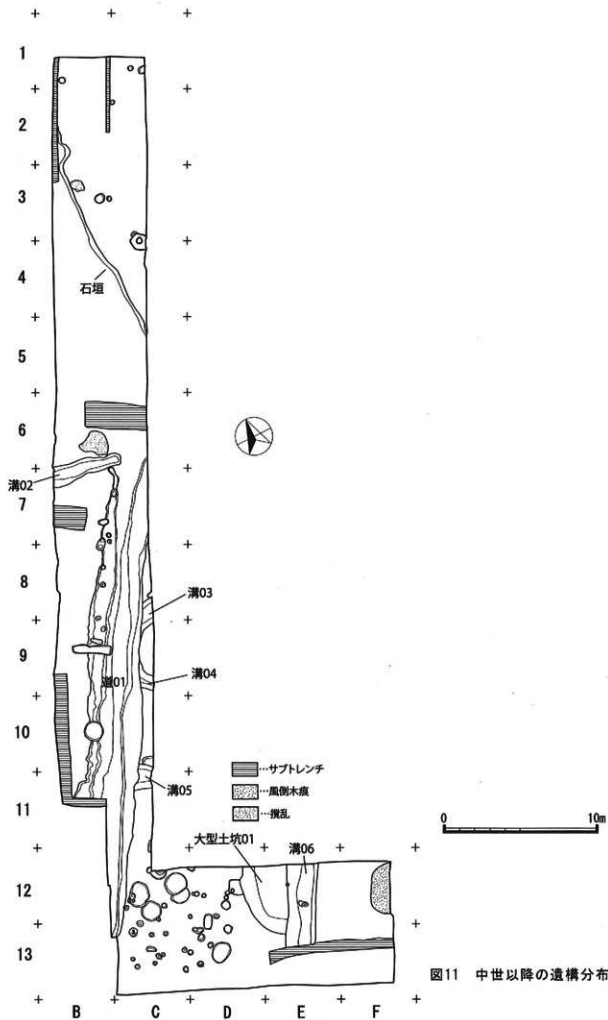


図11 中世以降の遺構分布図

2. 中近世以降

本調査では古墳時代前期の遺構の他に、大型土坑1基、土坑12基、ピット57基、道1条、溝5条、石垣が検出されている(図11)。これらの遺構は表土層下から発見され、明確な特性を持つ遺物がほとんどないため、年代やはっきりとした性格を判断しにくい、こういった遺構は過去に行われた調査すべてにおいて確認されているものと同じである。

道01・溝06(図12・13)

道01について、調査当初は溝と考えていたが、終了後の整理段階において規模や方向性から、第一次調査で検出された道に続くものと判明した(図14)。道01はCライン上を縦走り、7ライン辺りで消滅する。一方溝06は現段階では溝としておき、第1次調査で確認された道と同規模で、道01と平行し、なおかつ第1次調査の道同士の間隔と今回の道01と溝06の間隔がほぼ同じため、溝06も道の要素が高いと考えている。溝06は、E～F間を縦走り13ラインで消失しているが、表土除去時に削除したようで、延長線上の南壁断面には溝の落ち込みを確認することができた。

道01は2本の側溝によって構成され、西側の側溝は北へ上るほど幅が広がっており、広いところで1.5m、狭いところで0.5mを測り、深さは大体0.4mで保たれている。第1次調査の道と同様に底面はピットが目立つ。東側の側溝の最大幅は2m、深さは0.4mを測る。また、陶器の散乱や礫で補強されている様子は窺うことができなかった。西側の側溝とは違い底面のピットは検出されなかった。先述したように、当初は溝と考えていたために両側溝間の平坦面の状況は不明である。

道01は方形周溝墓02を重複し、方形周溝墓が埋没した後に築かれたと考えられる。第1次調査で確認された道は方形周溝墓や前方後方形周溝墓を避けて築かれており、築造時にはこれらを避けるだけの高まりがあったと指摘されているが、今回の調査で発見した道01は、第1次調査の道の延長であるから同時期に築造されたこととなる。したがって、今回発見した方形周溝墓02は、もちろん規模が異なることもあるが、第1次調査で確認された方形周溝墓及び前方後方形周溝墓よりも早くに高まりが失われ埋没したこととなる。

溝06の幅はほぼ一定で1.8m、深さは0.5mを測る。道01の西側側溝と同様に底面にはピットが存在し、遺物は伴わなかった。

大型土坑01(図13)

大型土坑01は、D～E-12～13グリッドで検出した。平面形は楕円形であると予想され、南北4.4m、東西2.7mを測る。道02を切り、ブロック土を多く含む土が西側から流入し、短時間で一気に埋められた状況が調査区北壁の断面から窺うことができる。

遺物は古墳時代前期に帰属するものがわずかに出土したが、埋土の状況や耕作土による擾乱も多かったため、混入品と考えるほうが妥当である。

この道02と大型土坑01の関係性は、これまで指摘されているものと同様であり、大型土坑01の性格も同じく道02の機能が失われた後に、何らかの目的で構築されたものと考えられる。

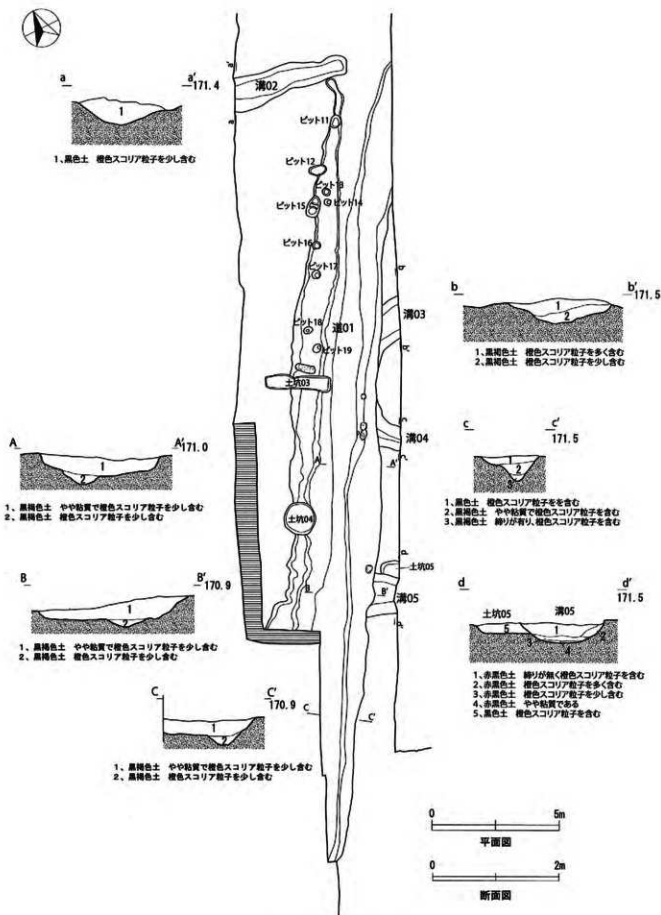
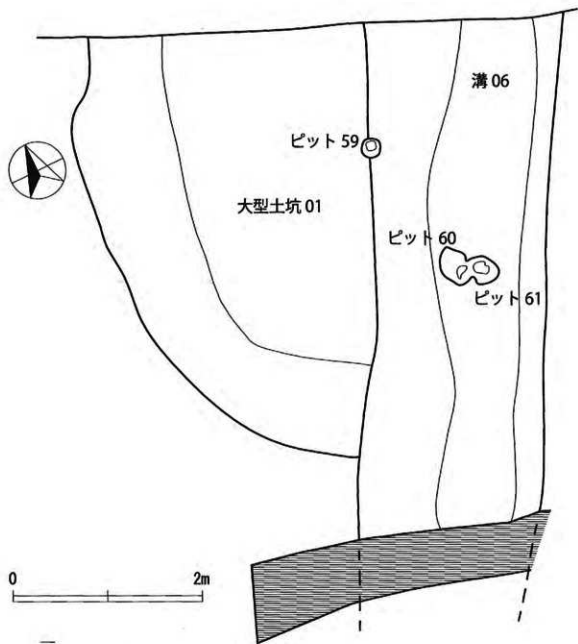
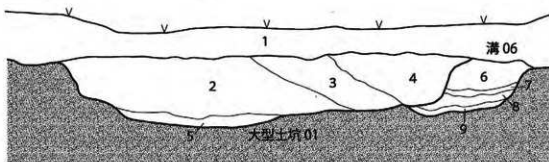


図12 道01・溝02～05



-171.50



- 1、表土
- 2、褐灰色土 大沢スコリアブロック・橙色スコリア粒子を少し含み、締りが無く濡りが激しい
- 3、褐灰色土 大沢スコリアブロック・橙色スコリア粒子を多く含み、締りが無い
- 4、褐色土 大沢スコリアブロック・橙色スコリア粒子を含む
- 5、褐褐色土 2よりやや暗く、橙色スコリア粒子を含み締りが有る
- 6、暗褐色土 橙色スコリア粒子を多く含み、硬質である
- 7、黒褐色土 橙色スコリア粒子を多く含む
- 8、黒褐色土 橙色スコリア粒子を多く含み、締まりが無い
- 9、暗赤褐色土 硬化面 ロームブロック含み、濡りが激しい

図13 溝06・大型土坑01

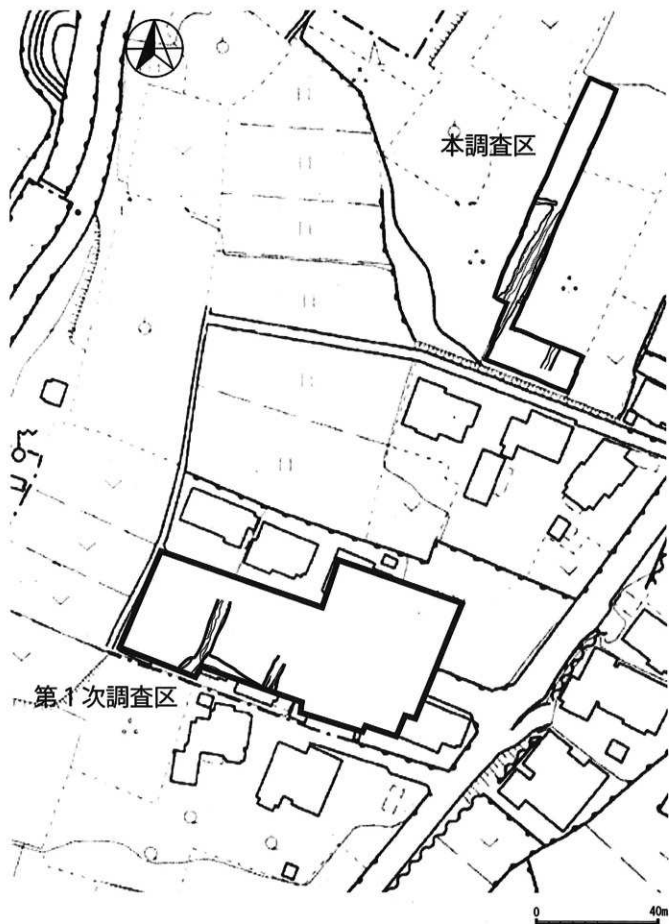


図14 第一次調査の道と本調査の道

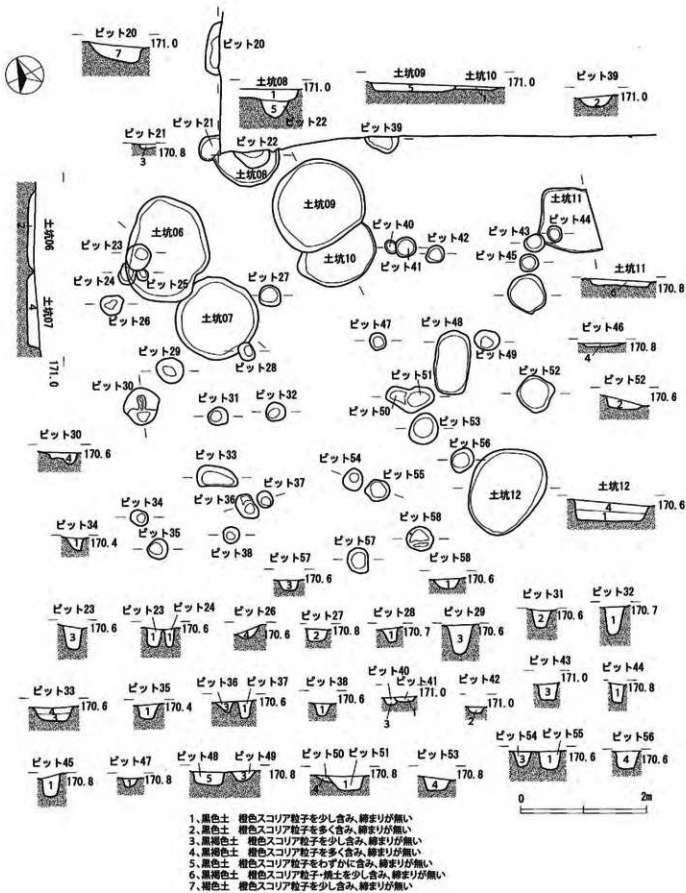


図15 調査区南側の土坑・ピット群

溝02・03・04・05(図12)

溝02は、7ライン辺りを斜めに横断する溝で、Cライン辺りで消滅する。幅1m、深さ0.3mを測り、調査区西側へ続いていると予想される。

溝03は9ラインを、溝04は10ラインを、溝05は11ラインを真っ直ぐに横断し、共に道01にほぼ直角にぶつかる。溝03の幅は1.5m、深さ0.4mで、溝04の幅は1m、深さ0.4m、溝05の幅は1.5m、深さ0.3mを測る。

溝02・03・04・05はいずれも遺物を伴わず、これらの明確な遺構の性質を示すものはない。しかし、溝03・04・05は道01で途絶え、溝02も横断する角度は違うが道01より東には展開しない。こうしたことから、これらの溝は道と関連がある溝と考えることができ、区画を表すものであるかもしれない。

土坑01～12、ビット01～05、09～60(図11・12・15)

調査区南半に多く点在する土坑群、ビット群はC～D-12～13グリッドに集中して確認されている。これらは埋土の状態が軟質で色調や性質もほぼ同じである。この検出状況から、どのような意図を持って配置されたものであるかは不明である。

こうした遺構は、これまで農業施設や有機物などが埋納された遺構と考えられていたが、第1

表2 遺構計測表

番号	直径(cm)	深さ(cm)	残存状態	番号	直径(cm)	深さ(cm)	残存状態	番号	直径(cm)	深さ(cm)	残存状態
ビット01	45	18	全周	ビット26	36	22	全周	ビット51	45	21	全周
ビット02	25	16	全周	ビット27	38	21	全周	ビット52	60	20	全周
ビット03	22	16	全周	ビット28	30	23	全周	ビット53	50	22	全周
ビット04	32	18	全周	ビット29	42	45	全周	ビット54	35	24	全周
ビット05	25	—	全周	ビット30	105	16	全周	ビット55	40	26	全周
ビット06	50	—	全周	ビット31	32	26	全周	ビット56	40	28	全周
ビット07	50	—	全周	ビット32	26	44	全周	ビット57	42	16	全周
ビット08	55	—	全周	ビット33	65	22	全周	ビット58	40	15	全周
ビット09	38	—	1/2	ビット34	28	20	全周	ビット59	20	—	全周
ビット10	40	—	全周	ビット35	30	24	全周	ビット60	42	—	全周
ビット11	50	—	全周	ビット36	44	16	全周	ビット61	38	—	全周
ビット12	70	—	全周	ビット37	26	26	全周	土坑01	70	—	全周
ビット13	25	—	全周	ビット38	25	20	全周	土坑02	120	—	3/4
ビット14	25	—	全周	ビット39	62	18	2/3	土坑03	260	—	全周
ビット15	85	—	全周	ビット40	22	10	3/4	土坑04	120	—	全周
ビット16	30	—	全周	ビット41	34	6	全周	土坑05	75	—	1/4
ビット17	35	—	全周	ビット42	31	8	全周	土坑06	165	10	全周
ビット18	38	—	全周	ビット43	32	26	全周	土坑07	130	18	全周
ビット19	38	—	全周	ビット44	25	30	全周	土坑08	105	16	1/2
ビット20	85	35	1/2	ビット45	30	36	全周	土坑09	145	10	全周
ビット21	45	6	3/4	ビット46	60	5	全周	土坑10	128	4	2/3
ビット22	105	25	1/2	ビット47	28	28	全周	土坑11	130	10	3/4
ビット23	40	40	全周	ビット48	100	20	全周	土坑12	145	32	全周
ビット24	34	32	3/4	ビット49	40	15	全周				
ビット25	20	28	全周	ビット50	30	10	全周				

次調査においては円形・方形土坑墓が検出されており、第1次調査の追加報告が行われた中でこうした遺構を安易に農業施設や墓であると位置づけず、これらの土坑・ピット群に対して違った視点が必要であると指摘されている。しかし、今回の調査においても決定的な資料を得ることはできなかった。

これらの遺構の規模と内容については表2を参照されたい。

また、調査区の北側には南東から北西に向かって斜めに石垣が走っており、石垣の下段には往来があったのか、幅1m程の硬化面が形成され、ここから小片ではあるが近世陶磁器が数点出土している。

第4章 遺物

今回の調査では、竪穴建物、周溝を中心にコンテナ総数2箱の遺物を得ることができた。しかし、今回の調査では前章で述べたように、近世の遺構や耕作による攪乱などから遺物の出土位置が正確に保たれているのか確認がない。そのため、ここでは図化可能なものをすべて提示し、図示した遺物の技法、形態等での特徴的な部分について触れつつ概観するものとし、各遺物の色調、胎土、法量、出土地点等については観察表を参照されたい。

1. 縄文土器(図16)

出土した縄文土器はいずれも破片資料であり、そのうち36点を図示している。所属時期は早期後葉～中期後葉を主体としており、第I群～第V群に分類して記述する。

第I群：早期後葉の土器(1～8)

いずれも胎土に繊維を含み、器面には擦痕が観察される。2～5は内面の条痕調整が特に著しく残存する。

1・2は清水柳E類に属すると考えられる。1は横位と縦位の細隆起線で区画し、横位の細隆起線上に刻目を施す。細隆起線による区画の上部には2条の絡条体圧痕文が横位に施される。2は横位の細隆起線上に絡条体圧痕文が施される。

3～5は縄ヶ島台式に属すると考えられ、沈線による樽掛け状の区画内に押引文が充填される。

6～8は無文土器であり、8は尖底土器の底部付近の破片と考えられる。

第II群：前期後葉の土器(9・10)

半截竹管による施文が行われており、諸磯式に属すると考えられる土器群である。9は半截竹管による爪形文の連続刺突により施文され、爪形文による横位の区画の間に波状文を施す。10は内外面共に剝離が生じているが、半截竹管による横位の平行沈線の施文が観察される。

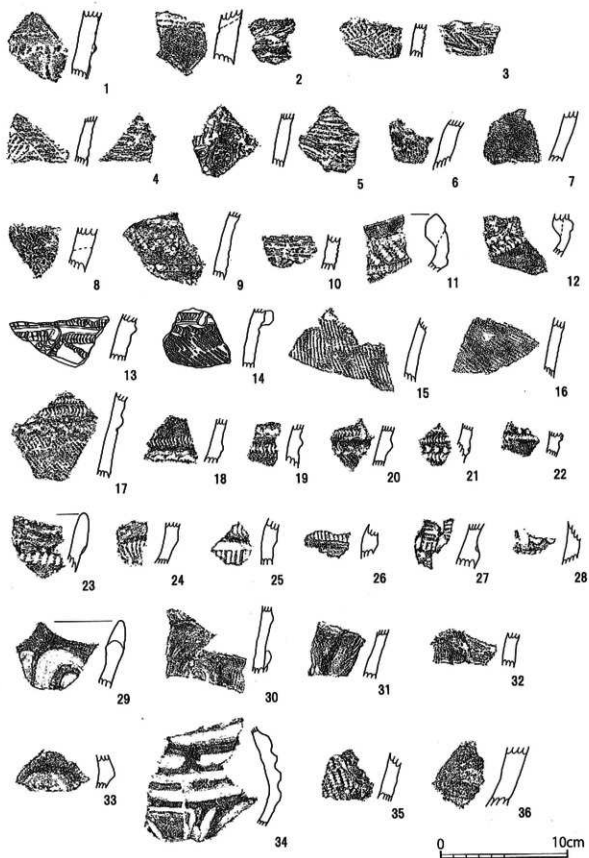


图16 绳文土器实测图

第Ⅲ群：中期中葉の土器（11～28）

勝坂式（新道～藤内式）に属すると考えられる土器群である。

11～22は三角押文を施す土器群である。11は口縁部の破片であり、波状の口縁に沿って三角押文による半楕円形の区画文を施し、区画文の内部を三角押文により埋めている。12は口縁部付近の破片であり、刻みを持つ隆帯による半楕円形の区画に沿って三角押文が施される。13は刻みを持つ隆帯による三角形の区画文を施し、区画の内部に三角押文が施される。14～16は同一個体と考えられ、地文にRL縄文を施し、隆帯による三角形の区画の一部が横位の隆帯上に残る。隆帯に沿った下部には三角押文を波状に施す。15・16はRL縄文を施す破片の上部に波状の三角押文の痕跡が残る。17～22は胴部の破片であり、横位の隆帯に沿って直線または波状に連続する三角押文を施しており、21・22は隆帯上に刻みが施される。17・20は地文にRL縄文を施す。

23・24は隆帯に沿って連続爪形文を施しており、23は波状口縁、24は胴部の破片である。

25～28は集合沈線を施す土器群であり、25・26は横位の隆帯に沿って縦位の沈線を施す。27は突起の周囲に横位および縦位の沈線を施す。28は横位の波状沈線に沿った下部に連続する沈線の痕跡が残る。

第Ⅳ群：中期後葉の土器（29～34）

隆帯および沈線による区画が施され、加曾利E4式に併行すると考えられる土器群である。

29～32は同一個体と考えられる。波状の口縁部付近の破片であり、弧状の区画の内部を縄文で充填する。33は胴部の破片であり、隆帯による弧状の区画の一部と思われる。34は横位の楕円形および平行線による区画の下部に曲線状の区画を施す。

第Ⅴ群：その他の土器（35・36）

いずれも中期に属すると考えられる。35は幅の広く浅い沈線により弧状の区画を施し、区画の内部にRL縄文を施す。36は無文土器である。

2. 古墳時代の土師器(図17・18)

今回の調査で得られた土師器片は、主に方形周溝墓01南溝、方形周溝墓02北溝・南溝、溝01から出土している。多くの資料が破片資料であるが、方形周溝墓01南溝出土の完形高坏(52)のみ完形品と言える。その他、方形周溝墓02出土の複合口縁壺(42)、溝01出土の単純口縁壺(43)、隣接した方形周溝墓01南溝、堅穴住居01、溝01から出土した破片が接合できた台付壺(49)の3点は胴部下半から底部を欠くが全体の形状を窺うことができる。

37・40・41は壺底部片である。すべて内面はハケ調整が施されている。外面調整はそれぞれ異なるが、底面から胴部への粘土帯の接合方法はすべて共通している。

38は、緩やかに外反する単純口縁の壺である。口縁端部は面を持ちタテハケの後、一部にヨコミガキを施していることを看取することができる。

二重口縁壺の口縁片である39は、磨滅が著しいが二次口縁が緩やかに外反する。一次口縁と二次口縁の接合部には接合痕が残る、やや粗雑な作りの印象を与える。今回図示した破片以外にも

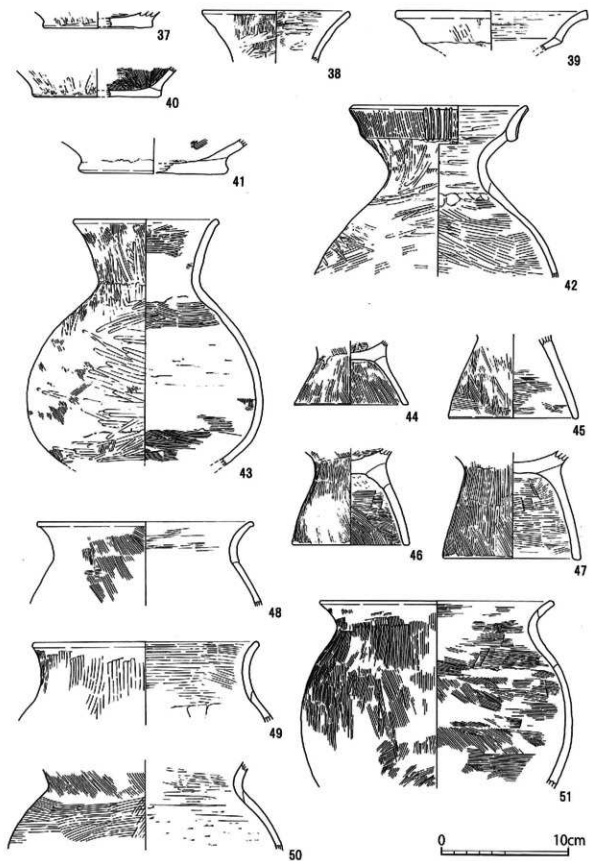


図17 古墳時代の土師器実測図

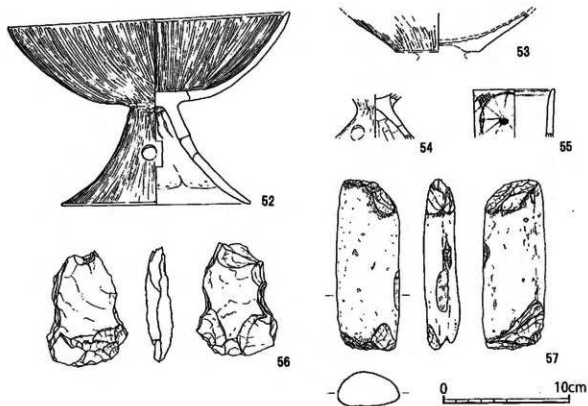


図18 古墳時代の土師器、磁器、石器実測図

同一個体と考えられる破片が数点ある。42は、複合口縁の壺で口縁上位外面にはタテハケの後に4本1組の棒状沈線が4方向に施文され、一部にタテミガキが認められる。口径13.6cm、現存高13.4cmを測る。口縁の複合部は直立気味に立ち上がり、中位から外反する。頸部は短く、複合部や肩部外面には装飾がなく、磨滅しているが頸部～肩部内面以外は赤彩が施されている。

43は、単純口縁壺で頸部が外傾し、胴部下半に最大径がくる下膨れの形態をしている。胴部下半、胴部上半、肩部、頸部から口縁部と整形技法や調整方向の違いから、この壺の製作工程を読み取ることができ、肩部内面のハケ調整に用いられた工具は、他の部位で使用されたハケ工具とは別のものが使われたこともわかる。さらに、磨滅や剥落が著しく赤変または煤が付着していることから、二次焼成による被熱があったことが考えられる。

44～47は、内外面ハケ調整の台付甕の脚台部である。44は脚部が低く、裾が大きく広がり、器壁が薄い。一方、47は脚部も高く器壁が厚くしっかりしている。45は、内外面の一部に煤が付着している。46は底部と脚部の接合部に幅があり、やや内湾する形態をしている。

48～51は、台付甕の破片である。48は、頸部にナゲ調整を施されているために、屈曲は弱くなっている。外面の頸部から肩部にかけてはナメハケで、内面の口縁部にはヨコハケが採用されている。また、外面の一部には煤が付着している。49は、48と比較してみると、より口縁部の屈曲はなくなり、ハケメも粗くなっており、焼成も不良である。さらに51は、頸部の屈曲はやや強

く、頸部外面調整はタテハケである。また、口縁部は外面タテハケ、内面ヨコハケの後にヨコナデが施されている。胴部は最大径が中位にあり、球胴を呈している。

一方で、50は外面には短い単位で施されたヨコ・ナナメハケ、肩部から胴部の内面には右方向へのヘラケズリが施されており、在来の台付甕や平底甕には採用されない技法によって整形されている。外面の短い単位で施されたヨコ・ナナメハケは一見螺旋状タタキに見え、内面ヘラケズリと合わせて、技法だけを見ても畿内の庄内甕を模しているのかと想像できるが、ヘラケズリを施しているにもかかわらず、器壁は在来の甕と同様に厚くなっており、庄内甕とは程遠い形態をなしている。さらに、内面の頸部から口縁部にかけては、ヨコミガキが施されており、庄内甕や在来の甕にはない要素を持っている。内面ヘラケズリ、外面ハケ調整を施すものは北陸系統の影響を受けていると言える。第1次調査では、伊勢湾地方をはじめとする外来系土器が多く出土し、今回の調査においても外来系土器が多く出土すると期待されたが、今回は明らかに外来的要素を持つ遺物はこの1点のみである。

52は、先述した唯一の完形品である高坏である。坏部には明瞭な稜はなく椀形で、脚部はラッパ状に開く。口径22.1cm、裾径14.8cm、器高14.5cmを測る。坏部と脚部はおおよそ1:1の関係である。口唇部はヨコナデによって面取りがなされ、脚部は3方向に円形の透かしが穿たれている。脚部内面以外は丁寧なタテミガキが施され、脚部内面はヘラケズリ、ヨコナデによって整形されている。また、外面の坏部と脚部の接合部にはヘラナデによって接合されたことが看取され、より一層丁寧な作りであることが窺える。

53・54は小型高坏の破片である。53は、内面が著しく剥離しているため器の厚さや調整は不明である。さらに坏部と脚部の接合面で剥離しているが、鋭い稜を呈し外面は丁寧なタテミガキが施されていることがわかる。54は、脚部片であり円形の透かしが3方向に穿たれている。脚部は大きく広がるようである。外面はタテミガキ、内面はヘラケズリによって整形されている。

3. 中世以降の遺物(図18)

今回の調査では、中世以降の遺構から出土した遺物は55のみである。二次調査においても指摘されていたことと同様に、中近世の土坑群からの出土遺物はほとんどなく、富士宮市周辺の諸遺跡でもよく見かけられる遺構で、大半が遺物を伴わないものである。55は、石垣下段の硬化面から出土した瀬戸・美濃産の筒形磁器碗である。灰釉が掛けられ、コバルトブルー色で文様が染め付けられている。19世紀中頃に帰属するものである。

他に今回は図化しなかったが、表採した資料にも55のような瀬戸・美濃産や常滑産と考えられる近世陶磁器類が若干含まれている。

4. 石器(図18)

石器は今回の調査では、風倒木痕内出土の打製石斧片(56)と壑穴建物01出土の蔽石(57)の2点のみが出土している。

56は、硬質砂岩製で撥形を呈している。ところどころ欠損しているものの、全体の形状がよくわかるものとなっている。わずかではあるが、くびれ部には装着時の紐による摩擦痕が窺える。

風倒木痕内から出土した土器は縄文土器で先述したIV群にほとんどが位置付けられるものであったため、この打製石斧も同時期に帰属時期が求められよう。

57は、硬質砂岩製の敲石である。長軸部に敲打痕を持ち、特筆すべき点として側面に磨り面を持つことが挙げられる。こうした磨り面を持つ敲石は、弥生・古墳時代遺跡から出土していることが知られている⁸。

5. 確認調査出土遺物(図19)

今回の調査区隣接地において平成20年度と平成23年度に確認調査が行われている。この中で平成20年度に行った確認調査の調査区から良好な資料が得られたので、ここで報告しておきたい。

58は、完形に近い壺だが、内外面は被熱により剥落が顕著であるため、胴部下半から底部上半がなく図上復元によるものである。口端部外面には断面逆三角形の粘土帯が貼付され、折り返し口縁を形成する。肩部外面には縄文+S字状結節文が二段施文され、口縁部内面には縄文+S字状結節文が一段施文され、S字状結節文上に小さな円形浮文が2カ所残る。この円形浮文が貼り付けられた間隔から、8方向に貼付されていたと予測できる。また、内外面の多くに接合痕が残り粗雑な作りの印象を受けるのに対し、底面にはミガキ調整が施されている。

59は、複合口縁壺の口縁部片である。小片であるが、複合部にはナナメ方向に縄文が施文され、棒状浮文が1本残存している。さらに上端部内面には、低い断面三角形の粘土帯が貼付されている。

60は、壺の底部片である。内外面ともに磨滅が及んでいるが、外面はタテミガキ、内面はナデで仕上げられている。底面には2方向の木葉痕が残る。

61・62は、S字状口縁台付甕の破片である。61は、口縁部の小片で二次口縁が大きく外反する。胎土から在地産であると考えられる。それに対し、62は白っぽい胎土から搬入品と考えられる、底部と脚部の接合部の破片である。外面は細かいハケの単位で整形されている。

63は、壺の底部片である。外面はタテハケ、内面はナナメハケで仕上げられている。

64は、泥面子で縦2.1cm、横2.1cm、厚さ0.5cmを測る。意匠は不明であるが、4方向に楕円形の装飾がなされている。

65・66は黒曜石製の打製石器である。65は石鏃で、凹基無茎式に分類されるものである。先端と基部を欠くが、全長に対して挿入はさほど深いものではないことがわかる。66は、錐部が大きく欠けた石錐である。断面は台形で、全体の形状はおそらく二等辺三角形のようなものであったのだろう。

注：富士宮市教育委員会 1985 『上石敷遺跡』、富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』

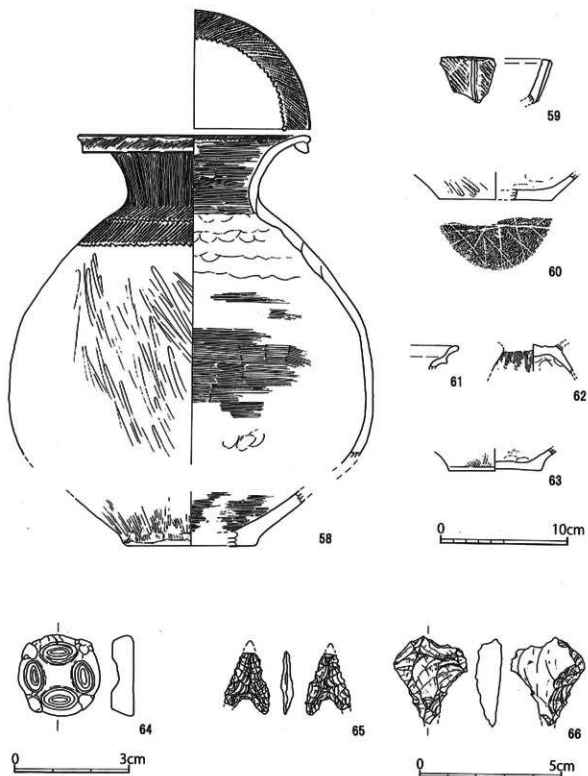


図19 平成20年度確認調査出土遺物実測図

6. 静岡県史報告資料(図20)

今回の調査で発見された遺物は、過去に『静岡県史』で掲載された遺物と同時期のものが多く、また、掲載された遺物の出土地点が今回の調査区よりやや北のところに近いので、図を再実測・再録しておく。

縄文土器

67は、縄文時代中期後葉の曾利V式に属すると考えられる。胴部のくびれを持たず、口縁部がほぼ直線的に開く弱い波状口縁の深鉢であり、口縁部を隆帯による弧線で区画し、区画内は無文である。胴部は逆U字形の沈線により縦位に区画され、区画内には太さの異なる棒状工具の組み合わせによる7条単位の条線がハの字状に連続して施される。胴部上半の外面にはススが付着している。

二重口縁壺

68は、「富士宮市大岩字丸ヶ谷戸七一四の一より採出 地下六尺五寸」と記されている。ここに記された番地は、今回の調査区より100mほど北に上った地点にあたる(図5)。

頸部から一次口縁部にかけて大きく外傾し、二次口縁部も大きく外反する。一次口縁部と二次口縁部の接合部は、丁寧に指で押さえて接合した後、外面に粘土帯を貼付して明瞭な段を成形している。そのため外面は鋭く屈折するのに対し、内面は緩やかに屈曲する。胴部は中央に最大径をもつ球胴体を呈し、底部径は頸部径よりも大きく、口縁部～頸部と胴部の比率は1:2となっており、自立できるものである。

外面及び口縁部から頸部内面にかけて丁寧にミガキによって仕上げられており、この範囲には赤彩が施されている。胴部内面は板ナデ調整である。

胴部下半には、焼成前に直径5mm程の円形の穿孔がある。また、底部は焼成後に大きな孔が穿たれている。出土位置が地下六尺五寸(約195cm)と伝えられ、調査成果からすれば、竪穴建物より深く、方形周溝墓の周溝内の包含と考えられ、このことからこの二重口縁壺は日用品から墓に供えるものに転用された可能性を指摘することができる。

第5章 遺跡の動向

今回の調査では、新たに方形周溝墓が2基確認された。第1次・2次調査と比べて遺物量は少なく、遺構自体の情報も今回は少ないと言える。しかし、わずかな資料から丸ヶ谷戸遺跡の動向が少しだけ見えてきたので、ここでまとめておく。

1. 方形周溝墓の年代観

今回の調査で確認された2基の方形周溝墓は、ともに墓全体の様子がわかるものではなかった。方形周溝墓01は直線にのびる周溝のみの検出であったが、完形の高坏(52)がそこから出土してい

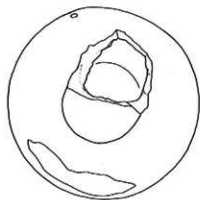
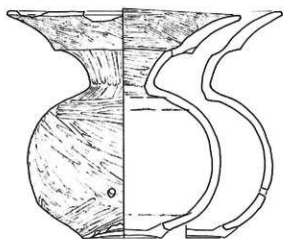
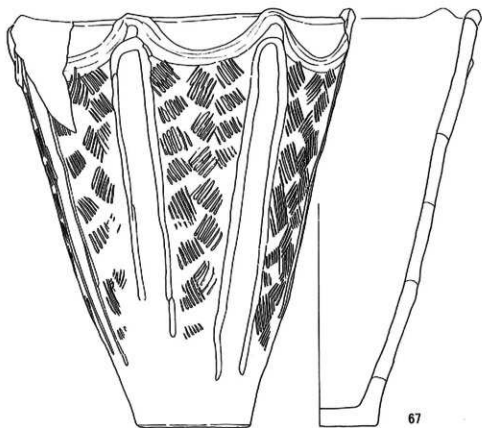


図20 県史報告の土器実測図

る。方形周溝墓02の南溝からは複合口縁壺(42)が出土している。

また平成20年度に実施された確認調査で出土した折り返し口縁壺(58)は、方形周溝墓01に隣接する調査区から出土し、今回の調査で方形周溝墓01の周辺で表採された破片と接合することができた。高坏もこの壺も形態・技法から大廓Ⅳ式期の範疇に収まるものである。したがって、確認調査で出土したこの壺は、方形周溝墓01と関連がある可能性が大きい。

一方、方形周溝墓02から出土した複合口縁壺と二重口縁壺(39)は形態・技法から大廓Ⅲ式期に帰属時期を求めることができる。こうしたことから、今回確認した方形周溝墓は、同時期のものではなくわずかではあるが時期差があるということとなる。そうすると、両者間にある竪穴建物01と溝01の帰属時期も大きく重要になってくる。

しかし、先述したようにこれらの遺構は石垣に切られていて、確実にこの遺構と伴う遺物が不明確である。そのため、明確な遺構の変遷を述べることはできないが、溝01が竪穴建物01を切っていることから竪穴建物が古い点は確実である。溝01はわずかな出土遺物から、方形周溝墓02とほぼ同時期の遺物が出土している。

よって小さい面積ながら、竪穴建物01→方形周溝墓02・溝01→方形周溝墓01と展開していったことが分かる。さらに、第1・2次調査に共通して指摘されているように、本調査においても竪穴建物が人為的に埋め戻され、その後同じ場所に方形周溝墓が構築されている。やはり、一貫して集落が強制的に居住域から墓域へと転換されていると言える。

2. 前方後方形周溝墓と方形周溝墓

今回の調査で確認された2基の方形周溝墓の様子ははっきりしないことは前述したが、それでも方形周溝墓02は南西コーナーを検出することができ南北の規模が9.6mだということがわかった。

こうした情報から、第1次調査で発見された前方後方形周溝墓と方形周溝墓を比較してみると、前方後方形周溝墓はさることながら、第1次調査で発見された方形周溝墓は、南北約14mを測り規模は明らかに第1次調査の墓のほうが大きい。

さらに出土した土器の年代観も第1次調査の帰属時期は大廓Ⅰ式期とされる。つまり、今回発見した方形周溝墓2基は第1次調査で確認された前方後方形周溝墓と方形周溝墓より後出のものである。第2次調査では方形周溝墓などの墓は確認されておらず、今回の調査区より西側で行われた確認調査でもこういった遺構は検出されていないことから、丸ヶ谷戸遺跡における墓域は、狭い尾根上に北へ展開していったと考えられる。そして、平成20年度の確認調査において、L字状の溝が確認されていることから、今後も同規模の方形周溝墓が発見される可能性は大いにあろう(図21)。

また、今回の方形周溝墓01・02は、大廓Ⅲ・Ⅳ式期に比定されるということで、東駿河地域の当該期において沼津市高尾山古墳、神明塚古墳や富士市浅間古墳と言った大型の古墳、つまり新たな要素が採用された墓が造られているのに対して、丸ヶ谷戸遺跡では在来の弥生的な造墓活動が継続していたということになる。なぜ、今まで東駿河地域において丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓は、先進的な墳墓とされてきたにもかかわらず、前方後方形周溝墓よりも後出のものは、従来の方形周溝墓を採用したのかは、現段階では当遺跡及び周辺の遺跡において当該期の資料が

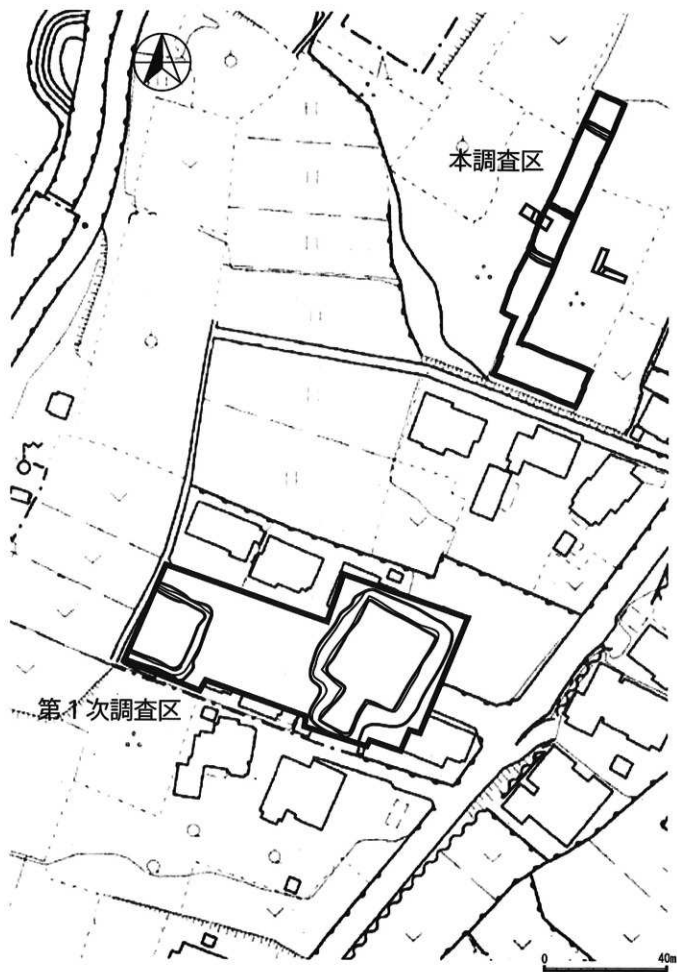


図21 当遺跡における方形周溝墓の分布

乏しいため言及することはできない。ただ、前方後方形周溝墓は形態的にも、外来系土器がたくさん出土したことから丸ヶ谷戸遺跡において優位なものであったことは間違いない。いずれにせよ、今後の調査成果に期待したいものである。

第6章 おわりに

今回の調査ではわずかな調査面積の中で、堅穴建物1軒、方形周溝墓2基、溝1条を確認することができた。これらの遺構や遺物から、第1次調査の前方後方形周溝墓よりも後出で、墓域が遺跡の北へ展開することが分かった。

富士宮市域では、滝戸遺跡で弥生時代後期から連続して方形周溝墓が築造される。時間軸で考えると、南部谷戸遺跡の方形周溝墓、丸ヶ谷戸遺跡第1次調査の前方後方形周溝墓・方形周溝墓へと移り、今回の調査で発見した方形周溝墓と滝戸遺跡の最も新しい方形周溝墓が同時期でこの段階が当該地域における方形周溝墓の最終段階と言える。弥生時代後期の方形周溝墓は周溝を共有するのに対して、古墳時代初頭の方形周溝墓は周溝を共有せずにそれぞれが独立していることが特徴である。

当該地域では、方形周溝墓が連続と築かれることはなく、単発的に方形周溝墓が築かれている中で、滝戸遺跡のみが連続して方形周溝墓が展開していき、丸ヶ谷戸遺跡の中でも方形周溝墓が連続して構築されていくことが分かったことは大きな成果と言えよう。

しかしながら、今回発見した方形周溝墓の帰属時期である大廓Ⅲ～Ⅳ式の集落は、今のところ発見されていない。そのため、依然として方形周溝墓と集落の関係性を見出すための資料は乏しく、今後の周辺に対する調査成果に委ねなければならないことも多いことが現状である。

近年富士宮市域を含める東駿河地域は、沼津市高尾山古墳の発掘調査により当該期の集落と墓制の変遷や年代観は大きく注目されている。そうした中で、静岡県内における古墳時代の開始を考える上で、非常に重要な発見であった前方後方形周溝墓の調査区から、北側の近い地点で調査を行い新たな情報を得ることができたのは、大変意味のあることである。

さらに、弥生時代後期から古墳時代初頭は大きな社会変革があり、前方後方形周溝墓の発見によって丸ヶ谷戸遺跡は当該期の遺構や遺物が注目される中で、今回遺構は伴わなかったものの縄文時代早期～前期にかけての遺物を一定量得ることができたことは、極めて貴重な発見であり、今後当遺跡内でこれらの時期の遺構が発見されることは大いに期待できる。

最後に今回の発掘調査にあたって、Yumi Rearityをはじめとした関係各位に、調査に対するご理解と多大なるご協力を賜った。文末ではあるが、感謝を申し上げたい。

表3 縄文土器観察表

番号	分類	変式	部位	焼成	胎土	色調	文様	備考
1	I	清水御 E類	胴部	やや軟	やや密 1mm以下の長石多く含む。繊維多く含む	10R7/3にふい黄橙		結条体任直文。縦位・横位陸帯
2	I	清水御 E類	胴部	やや良	やや粗 1~2mm程度の長石多く含む。繊維多く含む	5YR3/3暗赤褐		外面：横位陸帯（陸帯上に結条体任直文） 内面：斜位条直調整
3	I	騎ヶ島 合	胴部 上半	やや良	やや密 1mm以下の長石多く含む。繊維多く含む	7.5R5/4にふい黄		外面：青黒付紋直文の間に押引文 内面：条直調整
4	I	騎ヶ島 合	胴部 上半	やや良	密 0.1mm以下の長石・雲母少量含む。繊維多く含む	10R3/2黒褐		外面：青黒付紋直文の間に押引文 内面：横位条直調整
5	I	騎ヶ島 合	胴部 上半	やや良	やや密 0.1mm程度の長石多く含む。繊維多く含む	7.5R5/6暗褐		外面：青黒付紋直文の間に押引文 内面：条直調整
6	I	早期	胴部	やや良	密 1mm程度の長石・雲母少量含む。繊維多く含む	5YR5/6暗赤褐		無文
7	I	早期	胴部	やや軟	やや密 0.1~2mm程度の長石多く含む。繊維多く含む	6R2/6橙		無文
8	I	早期	底部	やや軟	密 1mm程度の長石少量含む。繊維多く含む	7.5R5/6橙		黒陶木造内出土
9	II	詰織	胴部	やや良	やや密 0.1~1mm程度の長石多く、0.1mm程度の雲母微量含む	7.5R7/6橙		無文
10	II	詰織	胴部	やや良	やや密 0.1mm程度の長石多く含む	7.5R7/6橙		平行波線（竹笠）
11	III	磨板	口縁部	やや良	やや密 0.1~1mm程度の長石・金雲母多く含む	2.5R3/4暗赤褐		三角押文
12	III	磨板	口縁部	やや良	やや粗 0.1mm~1mm程度の長石・雲母多く含む	2.5R2/3暗赤褐		横位陸帯（陸帯上に刻目）、三角押文
13	III	磨板	胴部 上半	良	やや密 0.1~1mm程度の長石・金雲母多く含む	5R2/4暗赤褐		横位・斜位陸帯（陸帯上に刻目）、三角押文
14	III	磨板	胴部 上半	良	やや密 0.1mm程度の長石・金雲母多く含む	5R2/4暗赤褐		横位陸帯（陸帯上に刻目）、三角押文、丸縄文
15	III	磨板	胴部 上半	良	やや密 1mm以下の長石・金雲母多く含む	5R2/4暗赤褐		丸縄文、三角押文
16	III	磨板	胴部 上半	良	やや密 0.5mm程度の長石・金雲母多く含む	5R4/4にふい赤褐		丸縄文、三角押文
17	III	磨板	胴部	やや良	やや粗 1mm程度の長石多く、0.1mm以下の金雲母微量を含む	5YR5/6明赤褐		丸縄文、横位陸帯、三角押文
18	III	磨板	胴部	やや良	やや粗 0.1~1mm程度の長石・雲母多く含む	5Y4/6赤褐		横位陸帯、三角押文
19	III	磨板	胴部	やや良	やや粗 0.1~1mm程度の長石・雲母多く含む	5Y4/6赤褐		横位陸帯、三角押文
20	III	磨板	胴部	良	やや粗 0.5mm程度の長石・雲母多く含む	2.5R4/4にふい赤褐		丸縄文、横位陸帯、三角押文
21	III	磨板	胴部	やや良	やや密 0.1~1mm程度の長石・赤色粒・黒色粒多く含む	5Y4/6赤褐		横位陸帯（陸帯上に刻目）、三角押文
22	III	磨板	胴部	やや良	やや密 0.1mm程度の長石多く含む	7.5R5/6明赤褐		横位陸帯（陸帯上に刻目）、三角押文
23	III	磨板	口縁部	やや良	やや密 0.5~1mm程度の長石・雲母多く含む	5Y5/6明赤褐		爪形文
24	III	磨板	胴部	やや良	やや密 0.1mm程度の長石含む	7.5R5/6橙		陸帯、爪形文
25	III	磨板	胴部	やや良	やや密 0.1~1mm程度の長石多く含む	5Y5/6明赤褐		横位陸帯、縦位集合波線
26	III	磨板	胴部	やや良	やや密 0.1mm以下の長石多く含む	5Y5/6明赤褐		横位陸帯、縦位集合波線
27	III	磨板	胴部	良	やや密 0.5mm程度の長石・金雲母多く含む	7.5R5/6明赤褐		横位・縦位集合波線
28	III	磨板	胴部	やや良	やや密 0.1~1mm程度の長石・雲母多く含む	7.5R4/6褐		波状波線、集合波線
29	IV	加首半E 4併行	口縁部	やや良	密 0.1mm以下の長石・雲母少量含む	10R2/4にふい黄橙		陸帯、波線、縄文
30	IV	加首半E 4併行	胴部	やや良	密 1mm以下の長石・雲母少量含む	10R2/4にふい黄橙		陸帯、波線
31	IV	加首半E 4併行	胴部	やや良	密 0.1mm程度の長石・雲母含む	10R2/4にふい黄橙		陸帯、波線、縄文
32	IV	加首半E 4併行	胴部	やや良	密 0.5~1mm程度の長石少量含む	10R2/4にふい黄橙		陸帯、波線
33	IV	加首半E 4併行	胴部	やや良	やや密 0.1mm以下の長石少量・1~2mm程度の赤色粒多く含む	7.5R5/4にふい黄		陸帯
34	IV	加首半E 4併行	胴部	良	やや密 0.1~1mm程度の長石多く、0.1mm以下の金雲母微量含む	5Y5/6明赤褐		陸帯、波線
35	V	中期	胴部	やや良	やや粗 1mm程度の長石多く、0.1mm程度の黒雲母微量を含む	5Y5/6明赤褐		波線、丸縄文
36	V	中期	胴部	やや良	やや粗 0.1mm程度の長石・雲母多く含む	5Y4/6赤褐		無文

表4 古墳時代の土師器・磁器・石器観察表

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)		残存率	出土地点	備考
					口径等	器高			
37	壺	7.5YR7/6橙	やや密 細かい長石を多く含む	良好	(8.4)	(1.2)	底部分1/4	通01	内面の一部割離
38	壺	10YR6/4にぶい黄橙	密	良好	(11.4)	(4.1)	口縁部1/6	惣穴建物01	外面の一部黒斑同一個体と考えられる小片複数有
39	二重口縁壺	5YR5/6明赤褐	密 細かい長石を含む	良好	(7.5)	(3.1)	口縁部1/8	通01	内外面ともに黒斑、同一個体と考えられる小片複数有
40	壺	10YR6/4にぶい黄橙	密 細かい長石・黒色粒を含む	良好	(10.2)	(2.3)	底部分1/6	方形両溝墓02北溝	黒斑
41	壺	10YR7/4にぶい黄橙	やや密 細かい長石を含む	良好	(10.4)	(2.8)	底部分1/4	通01	底面モミ状残存有
42	壺	7.5YR7/6橙	密 細かい長石・黒色粒を含む	やや良	13.6	(13.4)	口縁~頸部完形、胴部1/3	方形両溝墓02、通01	外面、口縁内面赤彩、外面磨滅
43	壺	10YR7/4にぶい黄橙	密 細かい長石を含む	やや不良	11.2	(18.3)	口縁部1/2、胴部1/3	溝01	胴部の一部黒斑、外面一部磨滅
44	合付壺	(外)10YR6/4にぶい黄橙 (内)5YR5/6橙	密 細かい長石・雲母を含む	やや不良	9.0	(5.0)	胴部2/3	方形両溝墓01南溝	
45	合付壺	10YR5/2灰黄褐	密 細かい長石・黒色粒を含む	良好	(10.0)	(6.5)	胴部1/4	惣穴建物01	内外面の一部黒化
46	合付壺	7.5YR6/6橙	密 細かい長石を含む	良好	9.2	(7.4)	胴部ほぼ完形	溝01	
47	合付壺	(外)7.5YR5/2にぶい黄橙 (内)2.5Y5/6明赤褐	やや密 細かい長石を多く含む	良好	10.8	(8.3)	胴部ほぼ完形	溝01底層一括	
48	壺	10YR5/2灰黄褐	密 細かい長石・雲母を含む	良好	(17.0)	(6.5)	口縁部1/8	溝01	外面黒化
49	壺	10YR7/2にぶい黄橙	密 細かい長石・黒色粒をわずかに含む	不良	(17.2)	(6.2)	口縁部1/3	方形両溝墓01南溝	一部割離
50	壺	7.5YR6/6橙	密 細かい長石・雲母を含む	良好	(6.0)		胴部1/3	方形両溝墓01南溝	
51	合付壺	10YR6/4にぶい黄橙	密 細かい長石をわずかに含む	良好	(18.0)	(14.7)	口縁~胴部1/4	方形両溝墓01南溝、溝01または惣穴建物01	胴部外面の一部黒化
52	高坏	5YR5/6橙	密 細かい雲母をわずかに含む	良好	口:22.1 深:14.8	14.5	ほぼ完形	方形両溝墓01南溝	口縁部と胴部の一部黒斑
53	高坏	7.5YR6/4にぶい黄橙	密 細かい長石・黒色粒を含む	良好		(3.0)	坏底部的1/2	方形両溝墓01南溝	内面割離
54	高坏	5YR5/4にぶい赤褐	やや密 細かい長石を多く含む	良好		(3.4)	胴部ほぼ完形	大型円形土坑01	外面赤彩か、外面磨滅
55	胎土			精良	(8.4)	(3.7)	口縁~胴部1/4	石垣築造面	紐跡、瀬戸産
56	打製石斧	硬質砂岩	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状態	出土地点	備考
56	打製石斧	硬質砂岩	(8.9)	(6.4)	2.0	112	一部欠損	黒斑木内面	
57	磨石	硬質砂岩	(13.2)	4.8	2.6	(294)	一部欠損	惣穴建物01床面	

表5 土器観察表(平成20年度確認調査)

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)		残存率	備考
					口径等	器高		
58	壺	10YR7/4にぶい黄橙	やや密 細かい長石を多く含む	良	口:18.2 底:(10.0)	(25.6)	口縁~頸部完形、胴部1/6、底部分1/4	一部黒斑、外面割離している部分が多い
59	壺	10YR7/4にぶい黄橙	密 細かい黒色粒を含む	良好			口縁部1/9以下の小片	黒斑
60	壺	10YR6/4黄黄橙	やや密 細かい長石を多く含む	良好	(9.0)	(2.1)	底部分1/3	底面に本黒斑、内外面ともに黒斑
61	S字状口縁合付壺	7.5YR7/4にぶい黄橙	密 細かい長石・金雲母をわずかに含む	良好			口縁部1/8以下の小片	在地産
62	S字状口縁合付壺	2.5Y7/3淡黄	やや密 細かい長石・黒石・雲母を多く含む	良		(2.3)	接合部1/2	瀬入品か
63	壺	10YR6/4にぶい黄橙	やや密 細かい黒色粒を多く含む	良好	(7.4)	(1.7)	底部分1/8	
64	器種	絵柄	胎土	良	径(cm)	横(cm)	重さ(g)	備考
64	茶碗	不明	精良	2.1	2.1	0.5	2.7	
65	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状態	備考
65	石鏝	黒曜石	(2.1)	1.6	0.4	(0.8)	一部欠損	
66	石鏝	黒曜石	(3.2)	(2.6)	0.4	(5.1)	一部欠損	

表6 再録品観察表

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)		残存率	備考
					口径等	器高		
67	深鉢	5YR7/3にぶい黄橙	やや密 細かい黒色砂粒・長石を含む	良		27.5	32.7	突起
68	二重口縁壺	5YR6/4にぶい黄橙	精良 石英・長石を含む	良	口:18.3 底:6.2	18.0	ほぼ完形	焼成前穿孔、焼成後底面穿孔、外面及び口縁~胴部内面赤彩

報告書抄録

ふりがな	まるがいといせき 3							
書名	丸ヶ谷戸遺跡Ⅲ							
副書名	Yumi Rearityによる宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	保竹貴幸、馬飼野行雄、今井和代、五味奈々子							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 Tm0544-22-1187							
発行年月日	西暦2013年5月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まるがいと 丸ヶ谷戸 遺跡	ふじのみやし 富士宮市 おおいわあざ 大岩字 まるがいと 丸ヶ谷戸	22207	市番号	35° 13' 45"	138° 37' 55"	20120312 } 20120423	500㎡	宅地造成 工事に伴う 発掘調査
			39					
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
まるがいといせき 丸ヶ谷戸遺跡	集落、墓	縄文・古墳 (前)		堅穴建物1棟、 方形周溝墓2 基、道1条		土器、石器等		第一次調査の 前方後方形周 溝墓より後出 の方形周溝墓 2基を新発見。

富士宮市文化財調査報告書 第47集

丸ヶ谷 遺跡Ⅲ

—Yumi Rearityによる宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成25年5月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111(内)

印刷 北洋印刷株式会社

〒418-0007

富士宮市外神東町84-2

(0544) 58-8031

写 真 图 版

図版1



1. 丸ヶ谷戸遺跡航空写真

図版2



1. 調査区全景（北から）



2. 竪穴建物01床面



3. 竪穴建物01堀方

図版3



1. 方形周溝墓01 (東から)



2. 方形周溝墓02 (東から)



3. 方形周溝墓02 (南から)

図版4



1. 南辺の土坑群（西から）



2. 土層堆積状況



3. 遺物出土状況



1. 調査区から富士山を望む



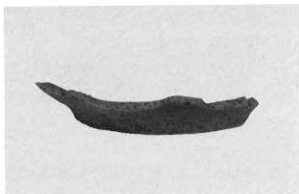
2. 丸ヶ谷戸遺跡 I
前方後方形周溝墓



3. 丸ヶ谷戸遺跡 I
方形周溝墓



1. 縄文土器



2. No. 37



3. No. 40



4. No. 41

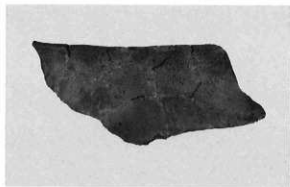


5. No. 42

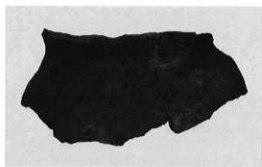


6. No. 43

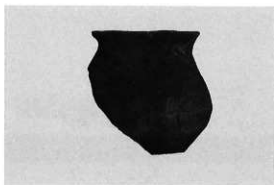
图版7



1. No. 49



2. No. 50



3. No. 51



4. No. 44



5. No. 46



6. No. 47



1. No. 52



2. No. 58



3. No. 67



4. No. 68



5. No. 68 底部